

抄録

対談「医療と宗教の接点」スピリチュアリティを考える

東京女子医科大学名誉教授

阿岸鉄三

16世紀フランスのパレは、「私が包帯し、神が癒したまう」といったが、これは人間の自然治癒力を指すと考えられ、治癒力は、自発的・自動的である。人間の行う医療は、治癒力を賦活化・活性化させる技術(ワザ)であると考えられる。一方、宗教(心)は、霊・霊性(スピリチュアリティ)を認識する感性を意味すると考えられる。これは、バーチャルな精神世界を創造する能力である。現代日本においては、宗教と医療とのかかわりが社会的表面に出ることを排除しようとする風潮がある。しかし、医療において避けることのできない生と死に直面する状況では宗教的心性が表出する。熊野本宮のポスターには、祈りと癒しの文字が描かれている。祈りは宗教の原点、癒しは医療の原点と考えると、蘇り(黄泉帰り)の地である約千年前の熊野は、後鳥羽上皇・後白河法皇にとって医宗同根・医宗合一の地であったと考えられる。米国国立補完・代替医療センターの報告によると2002年に最も人気のあった補完・代替医療は、自分で祈るであり、2位は他人のために祈る、5位はみんな祈るであった。

現代の日本にも、評判・人気の高い医師がいる。彼らに共通しているのは、医療の知識・技術を基本とし、それらに対する信頼を患者に共感させるある種のカリスマ性を持つことのようなのである。医師・宗教家・芸術家などにときに見られるカリスマ性とは、多くの人々の心に同調し、また、逆に他の人間にもその同調を認識させる能力のように考えられる。カリスマ性は波動に類似し、多くの人と共通の振動数を持つことtuningができ、ときに強く共振すると、昔口カビリーファンの少女が起こしたヒステリー発作のような精神的異常状態にまで発展することがあるようである。現代的な医学教育を受けていない新興宗教(オカルト)の教祖によって医療効果らしきものが現れ、ときには、現代医療では説明のできない医療効果、すなわち医療奇跡を発現することもあるようであるが、医療と宗教の関係を考えるうえでのヒントがあるように見える。プラシーボ効果は、医師と患者とが同じ心の場にあり、患者が医師を全面的に信頼するとき強く現れるのが一般的である。最近では、認識系が肯定的に受け入れると神経免疫学的陽性反応が起きるといわれており、プラシーボ効果発現の1つの説明とされていることから医療にプラシーボ効果を積極的に応用すべきとの考えもある。

医療と宗教の関係は、現代医療の中では、医療倫理の問題として現れる

ことがある。倫理とは、限られた社会で限られた時代においてのみ通用するものであり、普遍的・絶対的ではありえない。その文脈で、現代日本の実地医療に見られる掬れは、宗教的精神の重層性に一因があると指摘できる。優しい足るを知る森の民の精神は、古神道に現れているが、万物に霊が宿るとする儒教化仏教に修飾されても基本的には円環的思想をもっていた。そこに、明治維新、さらに第二次世界大戦後に流入してきた厳しい激しい風土的環境に育った砂漠の民のもつ神に選ばれた人間との思想に基づき、天地創造から世紀末破滅までの直線的思想にしたがうキリスト教精神が重層してきている。この重層構造が、ときに、倫理的観念の一貫性を揺り動かす。現象的は、移植・遺伝子治療における問題であり、霊性的バックアップのない死の告知であったりする。それは、ときには科学的医療と非科学的医療との対立として問題化し、科学とは何か、科学は絶対的価値を持つかという問題にまで発展する。